



# 令嬢騎士

と ちゅっ Chu!  
ちゅっ Chu! ちゅっ Chu!

小説 空蟬  
挿絵 御奈瀬

立ち読み版

プロローグ 始まりはいつも雨

第一章 出会いは突然に

第二章 恋路の始まり

第三章 想い交わり、人恋し

第四章 恋い焦がれ、日々は過ぎゆく

第五章 夏の夜の秘めごと

## 登場人物紹介

Characters



### あきもと こうた 秋元 耕太

日本人の父と外国人の母を持つ少年。  
やや小柄だが、気配りと気遣いのできる優しい性格で、考えるよりも、身体を動かす方が性に合っているタイプ。

### クリスティン・ エーデルハイデ

女ながらに騎士の道を志しており、耕太の護衛のために来日した大貴族の令嬢。騎士を目指す意志は強いが、世間知らずな一面も。

だから、ガラス戸がノックされたのにも、気づけなかった。  
カララッ——。

「失礼、します」

「んあ……」

浴室に入ってきた存在に首だけ振り向いて、夢見心地の生返事。

「……」

「背中をお流ししたく思い、失礼させていただきました」

すらり伸びた長身を包む、一枚のバスタオル。胸元は想像以上にこんもりと盛り上がり、薄布越しにもボリリューム感をありありと伝えてくれた。そして、先ほどまでより高めの位置でまとめられた、長く艶やかな銀色のポニーテール。青い切れ長の瞳が、じっとこちらを向いて。

「あの。耕太殿？」

腰を曲げ、覗き込んできた少女の瞳がさらにズームアップ。おまけにチラチラ胸元が、谷間がクローズアップ。

「っ……は、はひいッ！」

腰付近の魅惑のラインをまじまじ見つめてしまっていたことに気づき。また、闖入者が妄想の君その人であったことにも気づいて。谷間を見てしまったことに、ときめきと後ろめたさを覚え。あわてた拍子に、裏返った声で返答してしまった。

「お邪魔……だったでしようか」

見られたのではあるまいか。そそくさと腰にタオルを巻き巻き、気が気ではなく。妙に少女の声は遠くに聞こえた。

「ん？ いやいやいや。全然大丈夫。妄想とかなーんもしてないし」

だめだ。焦りすぎた。これではかえってバレバレじゃないか——そんな焦燥に満ち満ちた心持ちは。

「そうでしたか」

にっこりと差し向けられた、彼女の純真無垢な笑みによって杞憂に終わる。

「せ、背中。流してくれるって……」

どうして急にそんなことを——？ 疑問を尋ねるつもり言葉に。

「耕太殿のお母上に、感謝の気持ちを表するならこれが一番だとうかがいました」

長い髪のを濡れぬよう器用に左手で巻き取りながら。今日一日ありがとうございました。そう続けて彼女は頭を垂れる。その際、またチラリと、タオルとその奥のふたつの頂との境目が覗いた。

（うおおおおお。た、谷間がつ）

母ちゃんありがとう——。もはや驚いたただとか恥ずかしいとかいったごちゃごちゃした考えは湯気に溶けて露と消え。彼女に進言してくれた母へと内心で感謝する。

さりげなく目で探った彼女の胸の谷は、想像以上に深く、手がすっぽりとはまり込みそ

うな予感すら覚えてしまう。かあつと集まった血潮が鼻の奥でドクドクと。あわてて鼻をつまんで目を逸らし、ひとまずの事なきを得る。

「よろしい、でしょうか？」

うつむきがちの少女（バスタオル一枚）は「うんと言うまでは引きません」——そんなひたむきな表情でじっと返事を待っていた。

一拍、二拍。深呼吸をして心臓の高鳴りを多少なりとも抑え、導き出した結論は。「よろしくお願いいたします」

人間、結局は素直が一番だ。椅子を湯船のほうへとずらして、後ろに人一人分のスペースを設け、前のめり。背中を見せて準備万端。

「では……」

（お、おおう）

ユラ——と背後で気配が動く。熱気が舞う。今朝方のシャンプーのにおいとも違う、嗅いだことのない香りが鼻を突いた。彼女の、体臭だろうか。かすかで、やたらとへその下あたりに響く甘い香り。

ごし——。スポンジの感触は、強すぎず弱すぎず。ナイスな力加減を保っていた。

「痛くはないですか」

「う、うん」

ごし——。

一般家屋たる秋元家のバスルームは、お世辞にも広いとは言いがたい。基本ひとり用のサイズであるがゆえに、自然と寄り添うようにクリスの姿勢も前のめり。

ふにゆ。そんな魅惑のフレーズが、プリンよりも柔らかな感触とともに背中響く。

(フオオオオオオ！ こ、これは。もしや！ おっぱ……)

「どう、されました？ どこか痛かったですか？」

「い、いや、らირりようぶ、らირりようぶ」

思わず鼻血ブー吹きかけた。その鼻を押さえながらのくぐもった応対。同時により前傾姿勢を取って、今にも起き上がりそうな股間をわが身で潰すように覆い隠す。

彼女はまったくの善意で背中を流してくれているのだから。だからよこしまな考えなどは起こしてはいけない。勃起などもつてのほかだ。

考えるほどに、意識は下半身へと集中し。

「よい……しょ……」

むにゅうううっ……。

こちらが前傾した分、身を乗り出し、よりにもよって首のほうへと手を伸ばした彼女の、たわわな果実が強烈にたわんでムニユリ。室内の熱気にあてられ火照った肉が押し潰される。その感触は、さながら餅のごとく。

(餅肌ってこういうことなのかなあ)

吸いつくような肌の質感が心地よく、おまけにクリスの息遣いが——吐息がくすぐった

く吹きかかるものだから、なおのこと甘露な衝動が染み渡る。

「う……っ」

さすがにたまらず、きかん棒が目を覚まし。前傾姿勢で無理に押さえつけていた肉の砲身は、痛みを伴いながら屹立。膨張しようとする躍起になる海綿体との戦いが始まった。

「耕大殿？ もしや腰を痛めておいでなのでは……。少し、見せてください」

ぶんぶんぶん。ここだけはお見せできません。息を止めこらえるさなか、首を振ってどうにか意思を伝えようと試みたが、ダメだった。

男が入浴中の風呂にタオル一枚で現れた時点でかなりの確信を得ていたのだが、どうも彼女、世間一般の常識からずれている。元プリンセスだという母の、友人の子。その家柄も確かなものなのだろう。長子だとも言っていたし、ひよつとしなくても箱入りで、異性と触れ合う機会も少なかったのではあるまいか。

（そんな子と風呂でふたりきりだなんて。どどど、どうすればいいんだ……？）

どこまで見越してこのような事態を招いたのですか——母上様。

少女を焚きつけた母の真意を図るだけの余裕は、とうになく。意識するほどに心身はのぼせ上がり、思考することすら億劫になる。

にゆるんっ——。

「うあ………！」

「えっ………」



腰に巻いたタオルの奥へと侵入を許した側と、侵入した側。双方が素つ頓狂な声を同時にこぼす。男は、石鹸の絡んだ指先で大事な部分の先をつかまれた衝撃と、感激とに溺れて悶え。女は手にしたものの予想外の感触に、驚きながらも手を離さない。

「こ……これは？」

「えー……と。お、う……っ」

これは、と若干緊張気味の真顔で問われて素直に言えるものか。

「ま、まさか股間が腫れて……このように熱を!! す、すみません。まさか怪我をなされていたとは気づかずっ。冷やせば、いや、湿布か……?」

見つめ合ったきり。しばしぬるぬるとした指の感触とソフトタッチな力加減とにまどろみ、腰を引いて黙っていたものだから、純朴なる彼女はさつくりと勘違い。あたふたとあわてる様がクールな美貌の印象を変えて、よけいにかわいい。

(なんて感慨に耽ってる場合じゃねえ! ど、ど、どうする俺。ごまかせるか!?)

幸い彼女は勃起という現象そのものを知らぬと見える。ならば舌先三寸で切り抜けられるはず。——だが。

『耕太。人間、正直が一番だぞ』

不意に頭の中に響いた、言葉。幼き日に聞いた父の声が、ウソをつきかけた舌先をぐつと押し留める。確か、あれは小学四年の夏、ことさら暑い日の午後のことだった。

初恋の少女。おかつ髪はミヨちゃん。三ヶ月の間隣席だった彼女が一学期限りで転校

するのだと、前日にその当人から聞かされた日。とぼとぼと帰路につく途中でばったり、同じく帰宅途中の父に会い、言われたのだ。

『気持ちに正直になって、吐き出してこい』

(わかったよ、父ちゃん……！)

人間、素直が一番。ウソはよくない。

(あんどき……ミヨちゃんには玉砕だったけど今度は)

幻の父の手で再度。背中を押されて、決意はガチガチと、股間とともに固まり、そして。

「こ、擦ってくれれば……治る、かも」

若干どもりながらも、偽らざる気持ちを舌に乗せ、告げてしまう。

「擦ればいいのですか？ 手で……わ、わかりました！」

「よろしくお願ひしまっ……す、ううっ!!」

にゆる、にゆる、にゆる、にゆる……。

言い終えるよりも先に、さっそく石鹸と汗とが混ざりぬるついた感触が、手のひらという柔らかなスポンジとともに牡の幹に巻きついてきた。

「すごい。筋張って……それに、やはり相当、熱を持っています」

どうしてこんなになるまで放っておいたのですか。咎める口ぶりの少女の吐息が、耳の裏に吹きかかり、ますます腰の熱は上昇。屹立する角度と高度を強めた肉幹が、絡む指に鼓舞されるかのように鼓動を二度三度、轟かす。

——びくんっ！

(う……………つ、あ……………ああっ、ぜ、全然違ううううっ)

牡の鼓動におののきつつも、クリスの指先が浅く、筋張った幹の裏側を擦り立てる。キチリと爪を切り揃えた彼女だからこそ、男の手とはまた違った微細なタッチ。自分で擦るのと違って思い通りに刺激してくれぬもどかしさもあるけれど。かえってそのもどかしさが、ジワジワと真綿で締めるかのような歯がゆい甘美を増長させる。

「そ、こっ……………もっ……………とっ」

こそばゆさが股根に響いて、ついつい催促の声とともに腰を突き出してしまふ。

「ここが痛むのですか？ では念入りにつ……………」

摩擦治療に熱中するクリスの胸は、もうすっかり押し潰される勢いで背中にのしかかっていた。おまけに手つきは熱意こもる一方で、石鹸というファクターがもどかしくも心地よい刺激の緩衝材として、ぎこちない指の動きをフォローしている。

(ツツ……………！ い、今裏スジをつ、ツツウツ……………て、かすめ、たつ……………ああっ)

のぼせてしまいそうだ。バクバク弾む鼓動をわが手で押さえ、火照りきった吐息を吐き漏らす。刺激を受けては引き、また新たな刺激を求めて、白く滑らかな指にいざなわれるみたいに押し出されてゆく、腰。自分の物でありながら、ひとりで動くそこだけが、まるで意識を持った別のなにかにでもなったかのような錯覚に襲われた。

己が手でするのは、まるで違う。ピンポイントで熟知した弱点を擦り立て、ただ性欲

を処理するために行う自慰とは対照的に、もどかさまでもが狂おしく、その分だけ手の主に対する愛しさが膨張する。

——びくっ！

「うあ！ つ、つめたっ……」

「あ……気持ちよく、ありませんでしたか？」

まどろんでいた目を股に向ければ。少女は空いた手を蛇口から出る冷水に浸し、交互にタオルの内側へと突き入れて熱膨張した肉の幹を冷ましてくれようとしていた。

「さ、冷ましたほうがよいかと思つたのですが……すみません」

「い、いや。いい……よ。気持ち……いい」

確かにヒヤリとした感触に触れる最初の瞬間だけは玉袋が縮み上がるような感覚に、背筋までもが震え、射精感が遠のく。けれどじきに絡み合ううち、かじかんだ幹と指先とが同調したようにぬくもつていく。錯覚にすぎないかもしれないが、そんな気がするのだ。この身のためを思いやつてくれているのだという、精神的充足も大きかった。

「イイ、つから……少し水を入れる間隔を空けて……っう、そ、そう」

冷水を浴びる回数を減らし、できるだけ一度の交代で長く幹を擦り立ててもらえるように指示をし。

「な、なかなか難しいです……ね」

無防備に、微笑んだ。彼女の声の響きに胸弾ませ、少しの罪悪感をスパイスに牡幹はよ

りいつそう強張っていく。

じきに馴染んだ冷水がぬるくなり、竿に絡んで、少女の指との間で泡立つ。まるで単調な動きで飽きぬように氣遣つてくれているかのようになり、一度として同じ動きを反復することなく。しなやかな五本の指は生殖器全体を愛撫してくれた。

(うう……温いのと、冷やつこいのとが交互に、き、効くうっ……)

時に玉袋を温めるように手のひらで押し包み。その一瞬後には冷水で冷えたもう一方の手がぬるりと石鹸泡ごと幹に巻きついてきた。弛緩したタイミングで、冷水に引き締められ、またよりいつそうドクドクと鼓動が高鳴る。

「ン……ン、ン、あ……」

行為に没頭している、ただそれゆえに、ただだろうか。妙にけだるく、乱れて響く高めの少女の声に、溺れた。

(クリスのおっぱい……さ、先つちよ、硬く……なっ、てる……)

背に当たるその感触も、気のせいなのか——？

意識すればするだけ、少女の声の響きは甘く脳天に浸透し、タオル越しの感触はより柔らかに、その鼓動までもが感じ取れるような気がした。

「ぬるぬる滑って……ど、どんだん硬く、熱くなっているようですが。ほ、本当にこれだいたいぶなのでしょうか……？」

「だ、だいたいぶ、ぶっ、うあ！ だいたいぶ、ぶっ、だから、もっと……！」

善意を利用してしまっている。その後ろめたさすら、愛しさになりかわる。

「は、はい……！」

くちゅくちゅと、石鹼に混じり垂れ落ちた先走りの汁が、少女の指に搦め捕られて攪拌される。剣を握ることに崇高な使命を見出している少女。その指を分泌液で汚しているのだと思うと、たまらずへそ下でとぐろを巻いていた淫熱の塊がドロリ、またドロリ。溶け出した鉄が釜に流されるがごとき様相で、すべやかに幹内部を上昇してゆく。

(き……きた、ああ……っ！)

出る——確かな予兆を感じ取って、腰をしきりに揺する。故意に、肉槍の突端——傘の部分部分が少女の手のひらで擦れるように仕向け、尻に力を込めた。

「も、もうすぐだからっ、だから……は、なさないで……！」

「は、はいっ。ぎゅっ……と、ずっと握ってます。離れませんか……！」

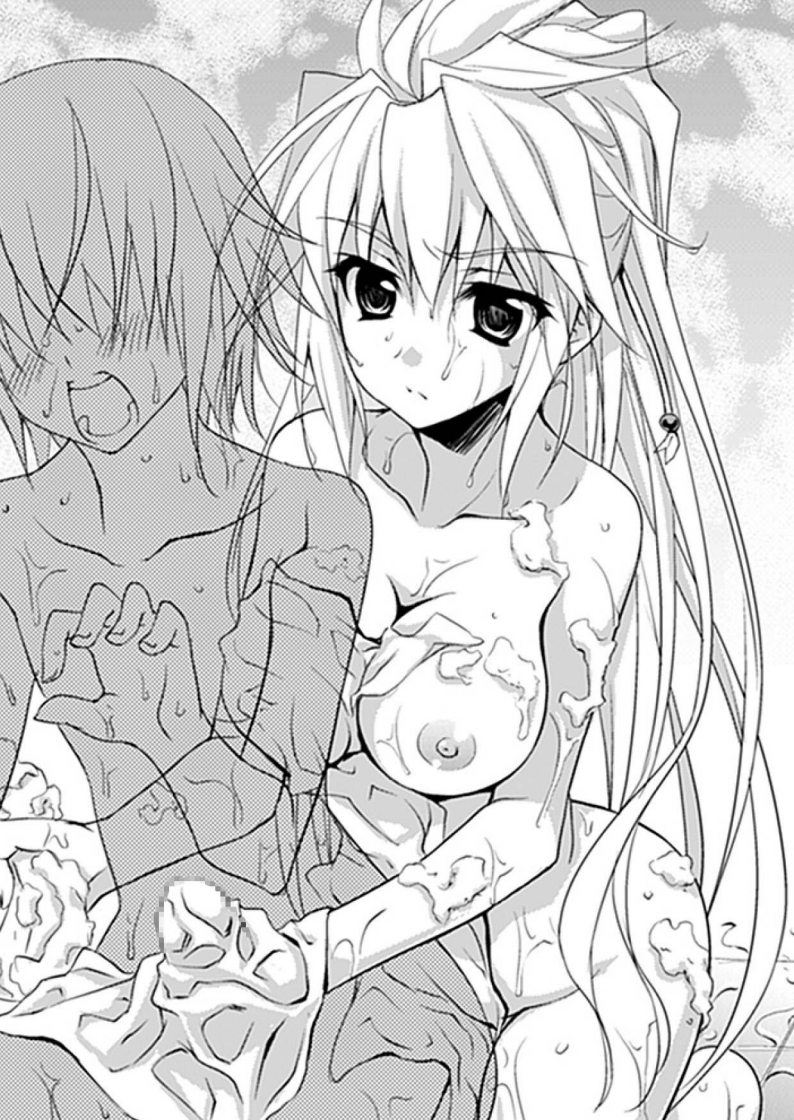
ただ、放すなど告げたから。だから離れないでいると、そう答えた。それだけのことだ。けれど、まるで愛の告白を受けたような衝撃に身を灼やかれ、のぼせて火照って混乱した脳天は舞い上がり。煮えた想いの丈を、肉の砲身へと装填する。

「っは、は、ア……も、ううッ！」

ドグン——まず真つ先に、心臓が飛び跳ね、視界が震えた。

「うあ……つく、す、滑るっ……！」

次いで、暴れる肉の幹を捕まえようとあわてた彼女の指が、知らずに触れた玉袋。白濁



生成器官が縮こまりながら跳ね上がり。

びゅりゅつ——。

「っあ！ あ……ああ！」

「っひ!? な、なにか、ぬめぬめしたものが……」

常よりしおらしい反応が、牡の本能——嗜虐心を充足させる。滴った我慢汁が、絡む指と幹との間に流れて、潤滑油として十分以上な働きをしてくれた。放すまいとすがる指先にも自然と力がこもり、圧力に溺れながら牡の幹はより猛々しく弾む。

「手……手、強く、先っぽ……し、扱いて！」

先端のみを重点的に、愛でてほしい。そんなあつかましい願いにも、クリスの指は早急に、従順に応じてくれた。

「こ、このつるんとした部分を、擦ればよい……のですね」

ぐり——。亀頭を手のひらでやんわりこねられ、胸弾み。息詰まる。

「う……おあ、あ、そ、そうっ……そのままっ、お、お願いっ！」

酸欠じみた状態で、引き攀れた声を発した喉が鳴る。生唾を飲む音を発したのは、果たして男女どちらの口腔だったか——。

「なんだか私もあなたの熱がうつったみたいで、変な感じ……です。つぶ、あ、ア……」

浴室の温度よりもずっとねっとり爛れた吐息を、耳裏に確かに浴びた。その瞬間。

少女の妖しい喘ぎに、全身の血がたぎる。ブグリと瞬時に膨張した白濁のマグマが、迫



り上がる肉幹を内側から押し上げた。その、圧迫感と、詰まりながらなお迫り上がる白濁の奔流に溶けゆく熱情に、嚙んだ歯と歯がガチガチと鳴る。こらえがたい愉悦の衝動が、口腔内に大量の唾液を発生させていた。

「あ……ま、また手の中で跳ねて……!!」

陶酔にも似たクリスの声が響きたび。漏れ出る歓喜の余波が先走りとなって、ぱっくりと割れた尿道口から噴き上がる。

ぎゅっ、にゅちゅ、にぢゅうっ——!

滑りながらも手放すまいと竿を握り締めた十本の細指。うち、左右の薬指と小指、計四本でカリ裏が締め上げられ、残りの指が被さった、肉の傘の中心で。

「ッ……!! 〜〜〜〜ッ!!」

びぐっ——びゅっぶびよりゆるるるるるるるるッ!

ついに限界を迎えた白濁の飛沫が噴き上がった。

息も吸えず金魚のごとくぱくついた口腔から、漏れ出るのは声なき咆哮。

「ひゃ……あ……!! えっ……?」

おそらく呆然としているのだろう、その手の内へと。粘りと、熱と、情欲とが凝縮された濁液の塊がぶち当たる。

びゅっ! びびゅ……びちゃっ、びちゃっびゅびぶぶぶっ!

「な、なにか出て……!!」

「ひ、あああつ！ こ、うたどのおおつ……変、です私つ、胸が……鎧と擦れてジンジン……っ。痛くない、のにつ、うずうずつ、しびれて、か、硬くなって、えっ……！」

左手でなでていた髪束が、彼女が首を左右に振ったことで滑り落ち、逃げていく。身悶える騎士見習いの少女は、わが身に起こった状況を理解できずに戸惑い、動揺し、それについてなお尻を振って肉欲を貪ることをやめられないでいた。

「感じて、そのまま……感じていいから……！」

それが好き合ってるってことの証明なのだから。そつと耳元でささやいた肯定の声に、安堵したクリスの肩がブルリと震える。許可をもらった直後に、膣内のヒダというヒダが謝礼とばかり牡の幹を掃きなでて。

（ふ、不意打ちイッ?!）

予想外の動きに促されたように、思わずズン——と力強く、子宮口を押し上げてしまう。「んぐうつんんうつんつ！」

押された尻が逃げ、追った牡の腰が突き上がる。壁との間で挟まれた少女が、おのずと押し潰された胸元を搔くように、全身を上下に揺すり立てた。

（顔……クリスの顔を、見たいっ）

喘ぐ際に震える、ヌラついた唇。濡れ輝く瞳に、たわんだ眉根。凛々しい風貌が羞恥と昂揚とに彩られゆく、その有様まで。想像の通りであるのか、それ以上なのか。この目で確かめたい。逃さず観察したいと、切に願う。

けれど、少女が恥ずかしがって壁を向いている以上、それは叶わぬことなのだ。

「んア……！ や、あつ……だめ、です。恥ずかしくつ、てえ……」

それとなく顔を振り向けさせようとあごに添えた左手を、少女は首を振ってやんわり拒絶する。

だから、せめて。せめて背後から見られる痴態をより多く、一秒でも長く記憶に収めようと、目を見開き。唇を噛んで腰元からの歓喜に耐え忍ぶ。

まだ、たった今子宮を突いた際に押し潰された亀頭が、ジンジンと甘いうずきを響かせている。波打つ肉壁の収縮に、気を抜けばすぐにでも精を吐いてしまいたいそうだ。

「あは、あうつ、んうんつ……！ こ、こうた、どのお……？」

「だいじようぶ。こんなことぐらいで嫌いになつたりしない。クリスが恥ずかしくなくなるまで、待つ……から……！」

にゅづる……ぢゅぶぶうつ！

「やはっあああ……っ！ ま、た……奥うっ……！」

尻をつかんだ右手が、彼女の腰を引きつけて。そのまま奥の奥まで肉の切っ先で割き貫く。子宮口を押し上げた瞬間に亀頭に響く蕩けそうな快樂衝動も、幹全体をみっちりと包む肉壁の、泣き出したくなるほどのぬくもりも。昨日までを思えば夢のような状況だ。

だから、焦ってすべてをなくすことが怖くもあつた。

緩やかだった腰の動きを徐々に、一段一段確かめるようにして速めつつ。

「っあ……どんだん、熱くなってるよクリスの身体っ」

肉の槍で突かれた女騎士が喘ぎを漏らす。その都度ギチッと引き攣れて蕩けた蜜を染み漏らす、少女の膣内で肉の鼓動も速まり続けた。

「こ、耕太殿の……せいす。あなたがそのように熱くっ、まっすぐな想いをぶつけてくるからア……」

前後運動の合間に、肉と粘膜を馴染ませるように腰を回す。次第に勢いを増し、ぶつかるとび盛大に鳴る水音。少女の愛液が伝い滴る腿を落ち着かせようと、しきりに左の手でなででは、すくい取った蜜液を己が口元へと運ぶ。

「ちゅぷ……あ。クリスの味、がする……」

正直味はさほどしなかったが——ヌルつく舌触りと生ぬるい味わいとが愛しく思えて、意識するよりも先に感想を口にしていた。

「ふえ……あ、ああ。私、粗相をつ……いけません、そのようなものを口につ、し、しないでっ……くう、あ、ああんっ！」

「いいんだ。これはおしっこじゃないし。それにつ……」  
まず、彼女の思い違いを正しておいて。

ぬ、ぶちゅうっ……！！

「ひあうっんうあああああっ！」

すぐさま膨張を始めた、肉の切っ先を子宮口へと押し当てる。仮に尿液であったにしても

も、愛しさを覚えてしゃぶってしまつたに違いない。

胸にあふれた想いの丈をどうにか伝えたい。もどかしさと恋慕とにさいなまれて、指の谷間に残つた蜜液をしゃぶりながら、怒張の先で処女地を打ち鳴らし続けた。

ぢゅぶ……ぢゅつ！ にゅぢゅぶぶぶうっ……。

「ふ、深あつ、いつ、いあああ……！」

応じるようにぬかるみの増した膣肉が牡肉を受け止め、また大量の蜜液が結合部からあふれ出る。

(はあ、は、ア……女の子の中つて、こんな……に……！)

気持ちいい——ものなのか。たつぷりの蜜の中に浸かりきり、腰の根元まで溶け合うような錯覚に陥りながら、実感した。

密着感の強まった肉の只中を掘削するように掘り進む。その際に擦れるヒダというヒダから、また真新しい蜜をまぶされて、パクつく尿道へとキスの歓待を浴びる。

時折鳴る鎧の金属音が気にならぬほどに、思考は至福の只中に墮ち込んで。甘くしびれた肉の幹全体が、いよいよ迫り上がる白濁の波に吞まれようとしていた。

「ふあ、ああ……胸も、股……もお……！ 変、です。まるで私の身体じゃない、みたいにい……イイツ！」

鎧を着込んでいる分熱気がこもっているのだろう。クリスがしきりに壁に押しつけた胸を、擦るように上下させている。

直接、鎧を外して真正面で見られたなら。さぞや淫靡な形に歪んでいるのだろう。今触れている尻肉以上に柔らかく、手のひらを出迎えてくれるのではないか——。

妄想は尽きず。想像の膨張に比例して、ただでさえ限界間近の肉幹へと肉欲がダイレクトに反映される。

「んふあつあああ！ もういっぱい、なの、にいつ……ま、だ中で、大き……くうつ、んう！ あ！ つひ！ ひあああああつ……！」

「はあ、はう、ううつ……ごめん、クリスつ……」

階下には両親がいる。物音をできるだけ響かせぬよう——そんな心配は、とうに思考の彼方へ追いやられた。もつと、もつと彼女の乱れる様が見たい。その一念だけ。

ただひとつの想いが若い心を突き動かし、汗に濡れた肉体を酷使させる。

「ふあ……あつ!! いやつ……ああつ」

背後から少女の左脚へと絡めた左腕を、そのまま引っこ抜くように上へと持ち上げた。片足で立つ格好となった少女との結合部が、すべて。おたがいの視線のもとに晒されて、肉の割れ目がヒクリと蠢く。

牡を啣え込むそこは蜜にまみれ、割れ目の周囲にうつすら生い茂る銀色の恥毛を湿らせて、べつとりと張りつけていた。中心部にはまり込む肉棒の先端は、今なお強烈な吸引に犯され、精を絞りつくされようとしている。

まるで甘噛みされているみたいで——そのたびに腰の芯まで轟く重い衝撃に神経を灼か

れながら。

「こんなに奥までっ……クリスに俺のが、入って……るっ。クリスのアソコっ……パクパク物欲しそうに動いてるよ……っ！」

感嘆とともに率直な感想を、寄せた彼女の耳元に届ける。

「いけ、ませんっ。こんなはしたない……か、格好……やあ、ひっ、あ！ あっあああはあああ……っ！」

顔を手で覆い、少女が一段高い声で啼いた。

魔がさした、わけではない。

この体勢が、そしてあけすけな感想が、さらに彼女の昂奮を煽ることになる。なぜだかそんな確信があったから。だから躊躇なく、脚を広げた少女の中心を、深く突く。

(恥ずかしがるたびにきゅうきゅうっ、中がうねって、縮まつ……て……！)

抜き差しする際に覗く自身の肉棒も、血管を浮かせ今にもはちきれてしまいそうなくらい膨張している。もう、すぐにでも漏らして、ぶちまけてしまいたいそうさ。

パンパンと肉同士がぶつかる音に、いやらしい粘着音が絡まるように混濁する。もう、加減がどうか考える余裕もなくしていた。

ぢゅぶつぶぶぶ！ ぶばんつぶぶっ！ ず、にゅぶぢゅぶぶうっ！

「やほう！ んつぶああ！ っはふっ、ううっ！ こ、うた……どのおおっ」

昂る肉棒の鼓動に、掻き混ぜられた蜜汁の音色が入り混じる。感極まった少女の嬌声が、

さらにそこに混じって——肉棒に染み渡る。

呼吸するのも忘れ。ただただおたがいが腰を押しつけ合い、肉の快楽を貪り合う。つながっていることを確かめようと、躍起だった。

どくん——。肉の鼓動が限界を訴える、そのたび。まぶたの裏が白に染まり、息苦しさを伴う切なさに胸打たれた。

「お願いだから……顔を、向けて……クリスの顔、見たいよっ！」

ほとんど懇願に等しい声の響きに、心動かされたのか。まだ顔を片手で覆ったまま、それでも指の隙間から青い瞳の光を覗かせてくれた。その唇を——奪う。

「んちゅっんうううう！」

「んふあ……ふあ、んむうっ、んん……！」

荒ぶる鼻息がたがいの鼻梁をくすぐりかすめていった。涙の溜まる瞳をぶつけるように重ねて、強く押しつけ合った唇を食む。唾液を啜り、もっと粘り気が強くなった愛液を掻き混ぜながら腰もぶつけた。

ドクドクと、牡の鼓動が子宮間近で鳴り響く。揺さぶられた子宮が下りてきて——ぬかるんだ唇が亀頭にキスをした。

「——ッッ!!」

歓喜の、声なき声で喉震わせながら。引き攣れる膣肉を割り裂いて。目一杯押し出した腰の先端で、白い欲望のマグマが噴き上がる——。



どぐんッ——!

第一射。

「んッッッ!! んむっ、んう——ッ!」

浴びるなり反射的に真上に跳ねた尻肉を追い、押し出した腰の先端でのを——子宮の扉を打ち叩く。解放感に溺れながら、膨張する肉の幹が再度。脈打った。

どびゅぶぐうううッ! びぐぶつびゅぶびゅぶびゅるるるうううう——ッ!  
「ふあっ……やはあう! んあああッ、出、てえっ……ひくうあッあああああッ!」

乞うように蠢いた膣壁の求めに応じて、白濁の熱源を注ぎ込む。

ギチギチと押し迫る肉洞に搾り取られるように、脈打っては注ぎ、また脈を打ち。延々と、竿の内部を奔る蕩けそうな愉悦に流される。

鎧ごと抱いた腕の中の肢体も、肉の鼓動に合わせて打ち震え。反らせた喉より喜びの涙声を吐き漏らす。

「ふあっああああ……っ! わ、たしもっ、もおっ……やはっ、くウンッンンンあああ  
あッああアア……ッッ……!!」

びぐっ……! ぎゅっ、ぎゅちィッ! びぐっびぐう……ッ!

「うぐ……ううあああッ! ま、だ……あッ!」

肉竿を折る勢いで締め上げる膣内を埋め尽くす勢いで、肉の悦びとともに粘つく液の塊が噴き出ていった。

脈動を浴び、膺全体がよりいっそう引き締まる。白濁を叩きつけるたび、負けじと大量の蜜を嘔いて引き攣れた膺肉の、ヌルつきながらも狭い内部。その隅々に行き渡れとばかりに、大量の精を吐き続ける。

どくうっ……びゅぐ、びゅびゅるぶぶふう！

止まらない。止めるつもりもなかった。腰から下の感覚がなくなったみたいで、いつまでも注ぎ続けられる。

子宮口に吸着され、ざわめきながら狭まった膺口に捕食される勢いで啜えられ。無数のヒダに蜜をまぶされ、なめ扱かれる。悶え、喘ぎながら精を吐く亀頭。そこから腰に、脳天にまで突き抜ける甘美の中。

(……っっ！)

ただただ、長引く解放感と下肢全体に広がった肉の悦びとに浸かり込む。

牡の脈動に同調したかのように噛み合ったタイミングで、少女の膺壁が絡みつuki、波打つ肉竿を掃きなで、すがりつく。ぱっくりと割れ精を吐き出す突端には、ぴったりと子宮の唇が吸いつき丹念なキスを敢行している。

ぽたぽたと。足元に、汗と濁液の混合汁が滴っては、水溜まりを作っていく。

「ふう……っ、あ、ああ……ま、まだ出て……っ」

ぶるっ——肩震わせた彼女の中がきつくうねって熱を孕み。

びゅ……ぐ！ びゅびゅりゅる……！



「あ……んっ」

かぶり。そんな擬音が聞こえてきそうな勢いで、ドロドロの亀頭が小さな口腔へと吸い込まれていった。

熱く、爛れた熱気に侵されながら回想する。

(……初めてのときは、むせちゃったりしたのにな。それが今は)

「んふ……っ、ちゅぢゅ、ん……ッふあ、んちゅっ、ちゅ、れちゅううっ、ぢゅぢゅっ」

こんなにもはしたなく唇を伸ばし、舌絡ませて肉棒にむしゃぶりついている。自分がそのようにしてほしいと願い、望まれるまま彼女も覚えてくれた。凛々しい風貌に、その実少し抜けたところのある真面目な少女。その、淫蕩なもうひとつの顔を独り占めできているのだと、考えれるほどに腰奥で、またムクムクと情欲の熱が盛り始めてしまう。

「ふあっ……あ、あなたにだけですよ。こんな顔……他の誰かに見られたらと思うと……恥ずかしくて死んでしまいそうなのだから……ん……ちゅっ」

「んっ……！ うん、っあ、知ってる」

いつだつてクリスは俺だけを見ていてくれたのだから——その分。それ以上に、俺だつて君のことを愛してやるんだと。心にとくに決めている。

「ふあむっ……んっ、ぢゅりゅっ」

強めのパキユームに腰が引け。すぐさま引けたその腰に巻きついた恋人の手で、元の位置にまで戻される。押しでは引き、また押して。熱っぽい口内から抜け出るたび。ヌラリ

濡れ光る肉の幹に、喜悅のしびれが駆け巡る。

「胸も……使われますか？」

陶然と紡がれた願ってもない言葉に、考えるよりも先にうなずき返していた。

「それでは、失礼いたします……」

自らの手で開きっぱなしの浴衣の前をなお開き。肩まで見せて、露出した乳房を手に取り——ぱふん。

（うわ！ うわ！ うわわわわ！）

幾度目にしても圧巻の光景に、瞬きすら忘れて見入ってしまう。肉厚で柔らかく、しつとりとした質感。宵闇に肌の白さがより鮮烈に際立って映る。それがみっちり、左右から半勃起の竿を挟んでいるのだ。

おまけにちよこんと申し訳程度に顔を見せた亀頭には、すぐに泡立った唾液のローションが垂らされて。にゆる、にゆると、ぬめり心地よい魅惑のマッサージが開始された。

「んっ、ふ……っ、ンン……！ 耕太殿は本当にこれがお好き、なのですね……っ」

脈動が速まったのを肌で感じ取り、艶めいた声でクリスがつぶやく。

「うっ！ つく、そ、そりゃあ……っ」

最初は触れることも叶わなかったのだ。それがこうして、望めば思う様味わうことを許される。想い募らせていた分、愛着は強かった。

「もう……このように、漏らされて……ちゅっ。ん……くちゅ、れる……ちゅちゅっ」

「う、あつ……す、吸っちゃだめっ……だつて、ばつ、おあ、あつああ……」

自然とおのずから腰を押し出し乳の谷間の柔らかな圧力を堪能し始めた矢先。ニュツと谷間から突き出た亀頭を、待ち構えていた少女の唇に吸い絞られる。浮いていた先走りを啜り飲まれ、そのまま啜えられてキュツキュと締め上げられ。情けない声を出しながら引かけた尻を、またしてもクリスの、鞆を持つほうの手が抱きつき阻んだ。

「んぶ……あ。ダメだダメだと言つても……ほら」

ぬばあ……と糸引き、解き放たれた肉の傘がほつこりと湯気を上げ、ヒクヒク蠢いては新たな先走りを浮かべている。その様を見せつけながら、微笑んだ彼女の両手が、再度乳谷を寄せ上げてばふばふと。

「こんな……胸が焼けてしまいそうなほどに熱く……硬くなさつて。ふふつ。丁寧に。じっくり揉みほぐして差しあげないといけませんね……？」

最近目にする機会が増えた恋人の悪戯っぽい表情。

（む、無邪気な顔の小悪魔……っ！）

見つめるだけでムクムクと股間が膨張してしまう、これもまた、彼女と過ごした日々の成果。条件反射、あるいは刷り込み。調教の賜物、でもあるのだろうか――。

嫌よだめよも好きのうち。本気で嫌な場合以外は、目を見ればわかる。そう最初にうそぶいてみせたのは少年の側だったが、近頃は逆に利用されることも多くなった。

柔らかかどこまでも沈み込み込みそうなそのくせ、プリプリとした弾力もあつて、挟まる肉

棒を押し返してもくる。魅惑の谷間で鼓動を刻む肉竿は、脈打ちながら見る間に硬度を取り戻してゆく。奔り抜ける肉の衝動に、いつしかされるがままとなり、激しく強く腰を振り立てていった。

「ぢゅりゅっ！ んぢゅ、んつく……まだ、結構な量が残って、まふ……」

言うなり乳肌で扱かれた肉の先端で、びゅっど喜びの蜜が噴く。青い瞳に見咎められたが運の尽きか——柔和に細められた瞳の柔らかさとは対象的に、パイズリフェラの激しさは加速度的に増して。

にゆるっ、ぬっ……ぶぶぶぶぶ！ にぢゅっ、にゅぢやつぬっ……ばぢゅうううっ！

「ふあ！ あっ、あぐっ……また、出るよっ……！」

なすがまま。誘われるがままに腰を突き上げ、唾液とカウパーとでドロドロの谷間を掘り進む。脇を締めることで狭まった谷間は、ほどよい圧力で幹を迎え入れながら、しつとり質感を保ち。まるで乳肉全体に吸いつかれていよう——息するのも忘れて、腰に神経を集中させてしまう。

（さっき出したばっか……だって、のにつ……！）

出したばかりだからこそ、敏感で。まだ竿に残っていた分も含めて、ドクドクと駆け上る。キュッと引き締まる睾丸を、滴る唾液が温め。

「んふあむ。ちゅっ——ぢゅぢゅぢゅうううっ……！」

ムリムリと唇を割った切っ先が、唾えられるなりねっとりと舌で搦め捕られた。念入り

に先端だけを吸い、かすめては浮いた先走り汁を啜ってゆく。手馴れた所作をこなしながら鼻息荒く上目遣いの恋人が、たまらなく愛しくて――。

さわ――。

「んふあ……？ んっ、んん……！」

首筋をなぞり上げ、ロングポニーテールを指で梳く。チラと見上げた視線が心得たとはかりに瞬き、強く、はしたない音色とともに啜りついてきて――。吠えると同時に、ドクリと噴き上がる肉欲の塊を、抗うことなく愛しの口内へと解き放った。

「つぐ、うおおあ……っ！」

びゆるツツ！ びぶびゆぶぶびイッ！ びぐ！ びゅっびよるびぶぶぶぶ――ツ！

「もごっ!! ……んっ。んんふうう……っ――っ」

コクコクと、肉を食んだままの喉が鳴る。爆ぜる肉欲のたぎりを嚙下する、彼女の瞳はうつとりと翳り、また瞬いて。

（ああだからその顔は反則ッ――！）

陶酔の表情に魅入られて、腰の底から吹き荒れる白濁のマグマをありつたけ吐き出し、ぶちまけていった。

「んぢゅっ、ぢゅううう――……。けぼっ」

飲み干して口を離すなり、かわいらしくゲップした。その彼女の様がまた愛らしく、猛った竿が絞り出すように精を噴きつける。





「やん……っ。んふ……たくさん出ましたね……」

鼻先に白濁を浴びながらにつこり微笑んだ彼女は、やっぱり美しく、淫蕩で——たまらなく愛おしい。

「ですが、これではお掃除の意味がありませんでした……」

「は、はは……そう、ね。……んっ！」

びゅぶ……っ。

ゆさゆさ揺さぶられただけでまた絞り出された白濁が、今度はちょうど開いた少女の唇あたりへ付着する。それをぺろりとなめ取るしぐさがまたイヤらしくて。節操もなく牡の幹は、ムクリ。

「まだまだ、元気……ですね」

「おっ、う……う……うん。だからその、手……いや、胸、をつ」

ゆさゆさ。むにむに。

乳の摩擦は再び徐々に強まって、絡んだ唾液と諸々の汁とがニチャニチャ音立てて密着感を高めてくれる。

「今度は……その。前のほうに、お願い……できますか？」

やがて、湿り気を帯びた声音のおねだりが紡がれ。

「や、はは。あ……了解っす」

期待に満ちた目で見つめられて、励まずにおれようか。かなり砕けた口調であったこと

も、無性に嬉しかった。ただ、守られる対象と護衛の騎士、というだけではない。近づいたふたりの距離を示しているような、気がしたから。

ここが男の見せ所。心決めてから腰に踏ん張りを利かせ、再び。

「じゃあ……どのような体勢がお好みでございましょう、お姫様」

「う。それはその……お、お任せしますっ」

茶化せば変わらず恥じらいを見せて、なのに決して抗わず。胸をすり寄せてくれる。

「ラジャー。それでは……」

足元に屈んでいた、ほとんど裸体の彼女を抱き寄せて、お決まりのキスから再開。

「ん……ふ……っ」

（そういえばさつきまでここに俺の……入ってたんだっけ）

一瞬だけ考えたものの、少しの嫌悪も抱かなかった。じきに被さるふたつの舌が唾液ごと絡まって、ぐちゅぐちゅと掻き混ざり、味などわからなくなってしまうのだ。それよりも、トロンと蕩けた恋人の姿を見られる嬉しさに、ずっと強く心揺さぶられる。

「……っふ。んあんっ……く、くすぐりたい、です」

「ごめん、冷えてるんじゃないかな、って思っつて」

はだけた浴衣から出しっぱなしの肩をさすっては、身じろぎ、甘えたような鼻声で喘ぐクリスの様子を堪能する。

「じゃあ……」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

# あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 690円(税込)




全国書店で  
**好評  
発売中**

**真夏のキャンプ場で勃発する  
天使vs魔族vs人間の  
三つどもえバトル!**

**思春期なアダムち**  
アウトサイド・ドリーム

【小説・さかき傘 / 挿絵・天海雪ひ]




全国書店で  
**好評  
発売中**

**俺のフラグは  
よりどりみりデレ**

【小説・栗栖ティナ / 挿絵・火曜]




全国書店で  
**好評  
発売中**

**平凡な少年が女体化!  
鬼に狙われた  
従姉妹を護れ!!**

**目覚めると従姉妹を護る美少女剣士に  
なっていた**

【小説・狩野景 / 挿絵・天鬼とくり]



**最強のヒロインの座を狙い、  
恋する乙女たちがH&バトル!**

**既刊LINEUP**

全国書店で好評発売中

- 仙股学艶戦姫 / ノブナガ! ①～④
- ヒルグリムメイド ①～③
- 無敵の姫騎士がDMに目覚めたようす

- 思春期なアダム ①～④
- 仮面娘らい萌 [カースイーター] ①～②
- 不死の吸血鬼がVSのご主人様を募集しているようす

- 借金お嬢クリス ①～③
- 魔海少女ルルイ・エルル ①～②
- オトミコ 僕は男の返女嬢

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!  
来かねる場合がございます。お問い合わせはメールでも手紙ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

**VALKYRIE**



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

**cranberry**



<http://www.cran-berry.com/>

**mille-feuille**  
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元  
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!